
—カクテル—

さくら朔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

―カクテル―

【Nコード】

N9541A

【作者名】

さくら朔

【あらすじ】

ある日主人公は、あからさまに怪しい女とぶつかり、15歳になってしまった。元に戻るために主人公は、魔法学園に転入することに…愛(?)と勇気(?)の学園ラブコメ!!(になる予定。)

登場人物紹介

登場人物紹介。それは作者が適当に考えてしまったプロローグをなんとか誤魔化そうとした苦肉の策・・・モトイ、キャラを紹介したいという作者の願いである。

【神代 進】かみよ しん

この物語の主人公であり、またギャグの中枢とも言える人物。実は強くて以前は軍の隊長っぽいことをしていた。翔子からのツッコミに身を字のごとく削られながらも、自分の盾になる人物を日々模索している。

容姿は黒目黒髪、物語り開始直後に身長が180から155に縮む。体は子供、頭脳は大人な某探偵少年の設定ばかりまりである。作者様、ファンの方ごめんなさい。

【中川 翔子】なかがわ しょうこ

進の以前からの知り合いであり日々、進にもはやツッコミとは言えないほど過酷なツッコミをいれる。現在は医者兼学園長であり、名前は作者の趣味である。

容姿は金髪のツインテールにいつも白衣を着ている。年は三十路前なのだが見た目は小学生くらいの美少女。

【神代 緋姫】かみよ ひめ

ツンデレ、ドジっ娘、天然という三冠王。正直、キャラを付け過ぎて他のキャラ設定に困る存在。天然だが口調は堅い。全身真っ黒なタイツを着て泥棒をしている。そんな漫画を知っている子は無視してほしい。進の身長が縮むことになった原因を作った張本人。

容姿は黒目黒髪、釣り目。身長は縮んだ進と同じくらいであり、十五歳。進とは何か関係がある。

第1話：お約束の目覚め（前書き）

ども！初めての作品なのでコメントと評価して下さるとうれしいです。ホント一言だけでも飛び上がるほどうれしいのでよろしくです。

第1話：お約束の目覚め

—ジリリリリリリイン—

ものすごくお約束で物語をはじめる作者を許してほしい。

ここは、『ヘルム村』と呼ばれる超ド田舎。

先程のお約束で目覚めたのは、この物語の主人公、かみよしん神代進である。

「すう…すう…」

どこまでもお約束なヤツである。

「しん…っ！もう起きて…！目覚しうるさいの…！」

隣に住んでいる医者がドアを乱暴に開けて入ってきた。

彼女は、ツインテールにメガネ、しかも白衣という何ともいえない服装をしている。

かなり幼い顔、低身長をしている。

彼女の名前は仲川なかかわ翔子しょうこ
これでも三十路だ。

ギロツ！！

うっ…！！と、とにかく翔子は進を起こしにきた。

進の部屋はベットにテーブルとイスだけと、とてもシンプルである。

そのベットに寝ている進に翔子は、釘バットを振り上げて、そして…

「たあゝゝ!!」

―ブウンツ―振り下ろした

「のわああっつ!!」

進は、辛うじて避けたが、

―ドオオン―

ベットは砕け散った。

「何してんのっ! 普通に起してくれよ! つかおまえツンデレかよ!」

突っ込みまくり。どうやら突っ込み属性みたいだ。

「何言ってるのゝゝ? ツンデゝ? …まあいいわゝ。早く朝ご飯の分の野菜とってきてねゝ」

と言われ素直そうにしたがう進。あくまでも見かけだけである。

(クソゝ三十路め!!)

ギロ!!

「うっ!!」

睨まれたときにはすでに進その場にはいなかった。

第2話：黒ずくめの少女（前書き）

話のすすめ方って難しいですね。ホントに。もうヘタなのでストーリーがあまり進みませんが、気長に読んで頂けると幸いです。

第2話：黒ずくめの少女

進は先程のことを考えていた。

（はぁ帰ったら土下座してあやまろう）

そんな卑屈な考え事をしながら歩いていると、

ードンー

少女とぶつかってしまった。

「いたっ！」

「す、すいません。だいじょう…」

進はそこで言葉がでなくなった。それも無理はない。この少女はそれほど怪しかった。

その少女は、真っ黒なサングラスに全身真っ黒なレオタードと絵に書いたような怪しさだった。

「あのー」

（怪しい…いくら何でも怪しすぎないかな？）

「はっ！何者だ！？」

「いや君が何者だよ！」

すかさず進がツツコミをいれる。

「貴様は追っ手か！」

「はい？何いってんだよ。？あと君怪しすぎるよ？」

正論でツツコム進。

「うるさい！あっ！」

「ん？」

そのとき少女がなにか黒い玉を落とした。
すると地面に魔法陣があらわれた。

「なっ！？」

「しまった！発動したのか！？」

「この魔法陣は！マズイ！」

進はすぐに反魔法―アンチマジック―を唱える。

『呪を打ち消せ！デイスペル』

「なっ！？」

少女は驚いた。それはそうだろう突然ぶつかった男が、高等技術のアンチマジックを詠唱破棄で使ったのだから。

「クッ！だ、だめだ！逃げろ！」

「チッ！すまない…」

少女は舌打ちすると、進の視界から消えていった。

進の指先が裂けはじめ、血が地面を赤く染めていく。

「もう、もたないな…」

（はあ、死んだら翔子に何ていわれるかなあ）

そして魔法陣は、進のアンチマジックを打ち破り発動した。

第3話：刹那

進は暗やみをさまよっていた。
どこまでも続く暗やみを…

―オレ…を…ケ…来い…

（誰だ！）

―わか…て…るだろう…

（ま、まさか―――）

進はそのものの名を叫ぼうとしたがやめた。
そのあまりにも強大な力を解放してしまうから…

――ン――シン――

「進！！」

「はッ！！！」

「進ッ！気が付いたッ！？」

「ここは…」（翔子の診療所か…）

どうやら気を失っていたようである。

しかし、だんだん気絶前の記憶が戻ってくる。

「確かオレは…そ、そうだなオレは生きているんだ？」

しかし自分の体を見るとなんともない。

「なんでだ？　しょう…」

なぜか翔子の顔が自分より上にある。

（翔子がでかく！？　いや、オレが縮んだのか！？　いやしかし、童顔でチビで三十路の翔子よりも小さく？）

ギロ！！

「うっ…！」

ほんとのことだろ（作者）

ギロ！！

うっ…!! (作者)

「はぁ、縮んだというより、若返ってるわ。あなたあの大战の頃に戻ってるわよ」

進は開いた口がふさがらなかった。

「へっ!? じゃ、じゃあ力も？」

「それは試してみないとわからないけど、外見は間違いなく十五、六歳のときの進よ」

ここで進を説明しておく。いや! 決して説明を忘れていたわけじゃないぞ。(作者) 進はもとは身長百八十センチ、やせ形、黒目黒髪とこの世界ではめずらしく、そして筋の通った鼻、二重目蓋の大きい目つまりイケ面なのだ。

しかし今は身長百五十センチほどになってしまった。

「えっと、何の話だったっけ？」

「作者がへただって話しじゃなかったかしら」

ぎくっ…!!

「何の話だ？」

「さあ？ しらない」 「とにかく試してみるか」

というわけでここは地下室―百メートル四方ほどで壁は真っ白な空間―である。

「ここを使うのも久しぶりね」

「ああ、オレがケガしてから使ってないな」

翔子が懐かしそうにつぶやく。

「じゃー、いくわよ？」

「いいぜ、来い！」

翔子が顔を引き締めて静かに言った。

「元『刹那』特務三番隊隊長、『瞬神』仲川翔子、参る！！」
進は口元がゆるんだ。

「元『刹那』特務零番隊長、
『代神者』神代進、承る」

—代神者—

神の代わりの者……

第4話：転入！？

翔子はその『瞬神』の名のごとく、二十メートルはあったであろう距離を一瞬にしてゼロにした。

いや、もう進の後ろに回っていた。

進は焦る事無く、呪文を唱える。

『スピードー』

その瞬間、進は加速して翔子の手刀を避ける。

「力は戻ってるみたいね。手加減は不要ね」

「いやいや、十五歳も年下をいじめるなよ」

進またホントの：ゴホン、ゴホン言っちゃいけないことを：

その時、時、時、翔子の空気が変わった。

「：そんな子と言う子はお仕置きね：」

翔子が恐い：ツインテールでカワイイいつもの翔子ではない：そこには鬼神がいた。

翔子は白衣を脱ぎ捨て、トレーナーとデニム地のズボンだけになった。

そして自らの武器をとった

「ちょっと待てよ！本気で？」

進は焦った。

彼女の武器は小太刀、といってもただの小太刀ではない。神具『風神』である。『風神』の特殊能力は主のスピード、パワー、等等など、主の身体能力アップさらに…

—ヴォン—

「うわっ！まじで…」

今のような真空派をとばせる。すごい武器なのである。進、死んだか？

「作者うるさい！！…ふう、しょうがないか…」

進はその呪文を紡ぐ、十五年ぶりに、

『大気と大地の精霊よ、我、神代進の名の元に…』

翔子は進が詠唱を始めたのをみていったん攻撃をやめた。

（さくて、十五年ぶりかくなまってないかなく進…）

やはり彼女も進の事をを思って風神を使ったのである

『…血の盟約により我の敵を打滅ぼせ！―メガグラデス―』

翔子の足元から岩が盛り上がり翔子に襲い掛かる。

翔子はかわしたが、その時、四方の壁が崩壊しはじめた。

「げっ！？やりすぎたかな？」

「進く！何してんのく！？何でいきなりあんな呪文使うのく！？もく出るわよくく！」

翔子と進は超スピードで地下室から脱出した。
地下室は完全に埋まってしまったようである。

「で、何でくあんな呪文使ったのくく！？？」

「いやあ、あそこまで戻ってるとは思わなくて」

「はあ、もういいわよ」

翔子はもう呆れて何も言えないみたいだ。

いったん診療所に戻りこれからのことを話した。

「で、これからどうするの？ もとに戻る当てはあるの？」

「ん？ 何でもとに戻る必要があるんだ？ だって力は戻ったし、いいんじゃないのかな？」

これを聞いて翔子は泣きそうになる。

「え…だって…だって…」

（だってそしたら、進と…進と…）

「何？」

「ああもう！ にぶいんだから！ いいの！ とにかく進はもとに戻らなくちゃいけないの！」

「わ、わかったよ…」

（なんなんだよ、翔子のヤツ…）

哀れ翔子…それにしても進、どこまでもお約束を守る男である。

「まず何があったの？あなたと道で倒れてたのよ。その姿で」

進はあの怪しい少女の事を話した。

「ふーん、進ってばそんな子供にラブコメ的ナンパで手出したんだあ。」

翔子の背後にドス黒いオーラが見える。

「ま、まで！まず手出してないし、な、ナンパでもない！」

「（翔子にはださなくせに）」

「ん？なんか言ったか？」 「言っていないわよ！！問答無用！！」

「ぎゃあああ！！」

進はこのあと、真空派と追い駆けっこをするはめになる。
ちなみに進が逃げる。まあ、言わなくてもわかるか：

「で本当にどうする？」

進がボロボロだが気にしない。どうせお約束ですぐ治るから。ぐあ
っ！！

「進く何してんの？」

「ん？掃除。」

「どこの？」

「社会の。」

ひ、ひどい…。
話を進めよう。

「たぶん刹那養成学校のく禁書庫にならく進のみた魔法陣が載って
いる本があるんじゃない？」

翔子が提案した。

「まあ、オレが見たことないならそこしかないかもな。でもどうや
って入るんだ？」

翔子は楽しそうに言った。いや実際、楽しんでいる。

「あなたが転入すればいいのよ？」

「はあ?？」

そんなわけで進は、刹那養成学校に通う事になった。

「まじかよおお」

第五話：旅立ち？

地下室が埋もれてから一週間後：

進のもとに手紙が届いた。

転入届である。

進は記入欄を見たが、何を書けばよいのかさっぱりのようにだ。

「まず出身？……どこだろう？」

ここエルム村には進が刹那脱退後、翔子の故郷ということで誘われ、それから隣同士住み始めたのである。

進は孤児院で育てられた。両親はわからない……

「わかんねえよ」

と言いながら寝そべり足をばたばたさせる進。いまの百五十センチという身長では、小学生にしか見えない。

進、子供化してないか？

何だか言葉遣いも微妙に違う……

どうやら性格も見た目どうりになりつつあるようだ。

（かわいい……ああ、なんてかわいいの〜！）

自分のことを棚に上げる翔子。彼女の見た目も似たようなもんだ。

「翔子どうした？」

「な、なんでもないわ〜。あなたはエルム村出身てことにして〜。あと名前もかえたほうがいいわよ〜」

「ええ？何でだよ？別に刹那辞めたあと資料とか全部抹消するだろう？」

刹那は軍である。その中でも進と翔子は特務隊だったため脱隊後、安全のために資料はすべて抹消されているハズである。

「はあ〜……刹那養成学校なのよ〜？私やあなたの元部下がいるかも知れないでしょ〜」

「でもそれなら見た目でバレルだろ？オレ今当時のままなんだぞ？」

なぜかもしもじしながら顔を赤くさせる翔子。

「そ、それなら〜進のこ、子供だ、って言えばいいじゃない〜」

「子供かあ……」

「なんなら、翔子がお母『ダメだな、子供とか言ったら詮索されるし、第一歳が合わない』さんに……」

「翔子なんか言ったか？」

「……っっ！！！なんでもないわよ！！！」

（いつもいつもなんなのよ……泣）

「しょうがない。親戚でごまかすしかないな。」

「そ、そうね」

またまた哀れな翔子……そしてまったく気付かないミスターお約束。

「も……！さっさと決める……！名前は仲川進……！保護者は翔子で決まり……！」

「わ、わかったよ……」

翔子は怒っているように見えるが、

（進と同じ名字……やった……！翔子……やった……！）

と内心スキップしていたのだった。

「向こうに着いたら手紙送るよ」

「なんか足りなかったら手紙送ってね。すぐ送るわ」

学園では寮に入る進。むこうの生活でいるものはもう送ってある。
持っていくのは百パルの銅剣だけである。《1パル約百円》

「生水飲んじゃダメよ！淋しくなったら帰ってきてもいいからね」

「子供じゃないって！」

「今は子供でしょ？」

「うぐっ！！」

言い返せない進。

「はぁ、いつてくる！」

「いつてらっしゃい」

進は出発した。元の姿に戻るために。

しかしその後ろで翔子が何か企んで、悪魔のような微笑みを浮かべている事を進は知らない……………

【?..?..?】

ここはどこだろうか、暗い部屋のなか軍人風の男が、何か言っている。

「そうですか……………発動してしまいましたか……………」

「はい……………申し訳ありません。」

あの怪しすぎる少女だ。
軍人風な男が言う。

「いえ、いいでしょう。あの魔法陣ならここの禁書庫にあるそうです」

「はっ 転入届？ 刹那要請学園でありますか？」

「君はそこへむかって下さい」

「はっ！」

「ああ、あと、その魔法陣を受けた男はどうなりましたか？」

「はい！ 確認はしておりませんが、魔法陣により年令退行が起ったようです。」

「年令退行？……わかりました。行きなさい」

怪しい少女は敬礼をして部屋から出ていった。

「クスクス、あの魔の王を復活させれば……この世界はどうなるんでしょうねえ……」

悪意は物語の裏で渦巻いている。しかしこの男は知らない。かつて世界を救った少年―代神者―が復活したことを……

第六話…これぞラヴコメ？

進はあと三時間程で学園に着くところまできていた。

魔法でスピードを上げてもいいが、進は風景を見ながら歩くのが結構好きである。

「ここらへんなかなか木が多いし、近くに川もあるみたいだし、いいなあ。こんなとこで隠居したいもんだ」

今の外見にあまりにも似合わない言葉である。

性格も若くなっているのだが、変なとこだけオッサンのままだ。

しかもこんな険しい森でそんなことを言えるのは進だけだろう。

「キャア—————」

「悲鳴っ!？」

進が声のしたほうに向かうと、女の子にダークウルフ二匹が飛び掛かっているところだった。

『氷帝フェンリル、汝の息吹により悪しき魂を閉じ込めよーアイス

タイムー』

ダークウルフは凍り付き、女の子の手前で地面に落ちた。ダークウルフ二匹は落ちた衝撃で砕け散ってしまった。
女の子は、ポカンとしている。まあ無理もない。

「大丈夫？」

「は、はい！」

「そうか。ケガなくてよかったな」

進が笑いかける。

女の子は顔を真っ赤にして進を見つめている。

身長は低くても、進は超美形である。まあ本人はまったく無関心であるが：

進：いくら何でも早すぎないか？うらやましいぞ！

「へえ〜！じゃあ君も学園の生徒なんだ。」

進が助けた女の子はどうやら学園の生徒だったらしい。

「はい。さっきは本当にありがとうございました。えっと、君もって事はあなたも生徒なんですか？」

「そう。今日から転入するんだよ。これからよろしくな」

「ふふ、よろしく願いますね」

彼女はニツコリと笑っていった。

彼女は身長百六十センチ、ウェーブの明るい茶色の髪に、まんまるい目、ちっちゃい唇をした美少女である。

「私は阿倍野さやか（あべのさやか）といいます。高等部の1年生です」

「ふーん。じゃあオレと同じだな」

「何がですか？」

さやかは不思議そうだ。

「いや、オレも高等部の一年に入るんだ」

「えっえっええええええ？小等部じゃないんですか？」

さやかがそう思うのも無理はない。今の進は身長百五十センチしかなく、さやかのほうが目線は上にあっただからだ。

「失礼だな！これから伸びるんだよ！」

実際、進は十八になる頃には変身前の体型になる。

「す、すいません。つい……」

「ついつて……」

そのあと進は学園に着くまでムスっとしていた。
ホントに子供化してるな……

第七話：学園長？

「で、でか！」

進は思わず声にだしてしまった。学園に着いたのだが学園はとにかく大きい。

まず校門がでかい。校舎のまわりは赤いレンガ造りの塀で囲まれている。塀の端がみえない。

「進さん、行きますよ」

「う、うん。」

（なんて大きさだ………）

校門をくぐると校舎が見えてきた。

「はぁ………」

進はもう声がでなかった。校舎は何階だろうか、はっきりいって学校の大きさではない。

その外見はまるで城みたいだ。いや、実際、城なんだろうけど。

「進さんはあの受け付けにいてください。同じクラスになれるといいですね。では私はこれで……」

さやかはそういうとどこかえ行ってしまった。

「……いくか。あの～。すみません」

「はい、なんででしょう？」

「転入する神……いえ、仲川進というものですが」

「はい、えっと……仲川進さんですね？ 仲川さんは学園長室に行ってください」

「はあ、わかりました……」

（学園長室！？まさかバレたのか？）

「学園長室は最上階です。あちらのエレベーターをお使いください」

「えれべいたあってなんですか？」

「魔力で移動できる道具です。あちらのドアの中で最上階のボタンを押してください。」

受け付けのおねいさんはおかしそうにクスクスと笑っている。

エルム村にはエレベーターなんかあるハズもない。
軍でも十年前にまだエレベーターはなかった。
進はわくわくしてエレベーターに入っていた。

「すっげえ！このえれべいたあってやつ！」

五分後、進はデパートにたまにいる、エレベーターのボタンを押し
まくる子供になっていた。

（この前見かけました。）

【学園長室】

進はようやく学園長室に着き、扉をノックした。

「失礼します」

「どうぞ」

中から声が聞こえたので、ドアを空けると……………

「よくきたわね。学園長の仲川翔子です」

邪悪な笑みをうかべた翔子がいた……進は無言でドアを閉めた。

「……………よし！夢だな！」

進は走りだそうとした。行こうぜ！ピリオドの向こうへ！

「夢じゃないわよ」

走りだそうしたら翔子に捕まってしまった。そして中に引きずられていく。

「まってまって！なぜおまえがいる！？」

翔子はさも当然のようにのたまった。

「だから、翔子は学園長なんだってば」

「聞いてないぞ!？」

「いってないもん」

翔子はそう言うと、でっかい机に、黒い皮の社長椅子に座った。全然似合っていない。

「じゃあ、学園の説明はじめるわね」

何事もなかったかのように話しはじめる翔子。進のことは無視された。

「まず、進にはこの指輪を付けてもらおうわ」

「指輪？」

「この指輪には力を押さえる能力があるの。今のあなたはクラスでいうと――支配者クラスーのトップ、レベルSSSだから、よほどのことがないかぎり外さないでね」

「支配者クラス？レベル？なんだそれ？」

「あっそっか。進は知らないか。まあ授業で習うし、今は気にしないで。進は最強クラスだから、学生らしく見えるように指輪

を付けてって事よ」

「ん。そういうことなら付けるよ」

「ち、ちなみに、デザインは翔子とお揃いだよ」

顔を真っ赤にさせる翔子。

「ん？なんで？」

「もー！なんでもいいの」

にぶいなあ……………

「今思えば翔子が学園長ならわざわざオレが転入する必要あったのか？」

当然の質問をする進。

「それなんだけどね。禁書庫は軍の所有物なの。だからいかに私といえど、勝手には、入れないの」

「それでオレが忍び込むってわけか」

「そういうこと。あと忍び込むときこれ使って」

「こ、これは……………」

それは黒装束に純白の手袋、ごつごつとしたこれまた純白のゴーグル、これは進が利那時代の任務時にきていた服と同じものであった。

【学生寮】

「たく！無駄遣いしすぎだろ！」

寮も大きかった。校舎程ではないがかなり大きい。それが3棟もある。まあ高等部生徒千二百人が住んでいるのだから当たり前だ。

「まあまあ。右から順番に1、2、3年生の割り当になってるんだ。進の部屋は一番右の三階の一番奥の部屋だよ」

「了解です。学園長さま」

翔子の真似をする進。またそんな命知らずなことを…………

—ヴォン—

「うわっ!!!」

翔子から風神の真空派が飛んでくる。

「誰のマネかな〜?」

表情は笑っているが目は笑っていない。まあお約束だし。

「だ、誰のマネでもないです……」

「よろしい〜」

翔子に尻にしかれっぱなしの進だった。

【進の部屋】

「へえ……結構いい部屋だな。キッチンが付いてるって事は自炊か……」

そこは、リビングに隣接したキッチン、寝室もあるなかなかの部屋だった。リビングは十畳程、寝室は八畳ほどと一人で暮らすには十

分な広さだ。

「荷物は……届いてるな。今日は久しぶりに長旅で疲れたし、寝るかな」

進は備え付けのベットで早々と寝てしまった。今は休んどいた方がいいだろう。

明日から作画的なラブコメが始まるのだから……

ニヤリッ！

第八話：自己紹介？

―オレの名を呼べ―

（またか……しかし前よりはっきり聞こえるな）

―おまえは必ずオレを必要とする―

（もう、おまえを解放しない。おまえはこの世界に必要なんだ。）

「はあ」

（またあの夢か……しかしだんだん夢を見る周期が短くなっている……）

進はめずらしく早く起きた。現在、七時ちょうどである。

「なんか作るかなあ」

進は冷蔵庫をあけて材料を取り出そうとしたが…

「しまった……………」

冷蔵庫の中身は、買い物をしてなかったらあるはずもない。
進は転入初日からお腹をならしたまま登校したのだった。

【職員室】

（はぁ、お腹が…減った……）

「失礼します」

ガラガラガラ……

進は中にはいると一番近くにいた先生に声をかけた。

「あのーすいません。転入してきた仲川ですけど……」

「ん？そうかそうか、君が仲川進くんかい？」

「はい。担任の先生はどなたですか？」

「ああ、それは僕だよ。僕は神崎、かんぎきゆう神崎祐だ。よろしくね」

神崎先生は23歳くらいだろうか。だいぶ若く見える。丸い眼鏡を掛けていて、とても温和そうそうな人だ。

「実は言おうと転入生は君と、もう一人いるんだよ。さあこっちにきて」

「はい」

その少女の容姿は漆黒の腰までのびた髪、切りそろえた前髪、白い肌少しきつめの印象を受ける切れ目。
だが身長は進と同じくらいで可愛い、いやそれでも美しいという言葉葉が似合う。

「かみよひめ神代姫です」

（神代！？）

進は表情を崩さず答える。

「仲川進です。よろしく」

「よし！じゃあ教室にいこうか。朝礼だ。ああ進くん。学園長から手紙だよ。すぐ見てくれって」

神崎先生が進に白い封筒を手渡す。封まで押してある。どうやら大切な手紙のようだ。

「はい。ありがとうございます」

（手紙？なんだろう。翔子のヤツ）

進は封筒を開くと、一枚の校章の入った青いカードと手紙が入っていた。その手紙にはこう書いてあった。

進へ

前、話していたレベルの事ですが進はCレベルで登録しておきました。同封してあるカードは身分IDカードです。学園内での買い物はそれで行えます。

追伸

生徒に手を出したらロリコン呼ばわりしたあげく風神で切り刻みます。

翔子より

（うわゝ。追伸に突っ込みたい。IDカードか…懐かしいな……………）

てか翔子、手紙だと“ゝ”つけないんだな……………

そんなこんなで教室に着いた。

「じゃあ二人ともちょっと待っててね」

そういつて神崎先生は教室に入ってしまった。

(それにしてもこの娘……神代か……ん?どこかで……?)

「おい。貴様何者だ?」

(この話し方どこかで……)

「ああゝゝ! そうだ君はあの時の……」

女の子……と言おうとしたところで、神崎先生に呼ばれた。

「この話はあとだ!」

姫はそう言うと言教室に入って行ってしまった。進もその後につづくと……教室内は歓声につつまれた。

キャア~~~~!カワイイ~~~~!

うおおお~~~~!よっしゃ~~~~!

ちなみにカワイイは姫ではなく進に向けられている。

「じゃあ二人とも自己紹介して」

神崎先生がそう促す。

「あの、何を言えがいいんですか？」

「とりあえず名前、レベル、武器かな。まああとは好きなタイプとかね」

神崎先生がおどけて言う。以外とこの先生はノリがいいようだ。

「えっと、仲川進、レベルはCです。武器は剣を使います」

そう言うとき男子は笑い、女子は守ってあげたい!などと叫んでいる。

(なんか変な事言ったかな?)

「神代姫。レベルはA。武器はムチだ」

姫が静かに言う……

きゃあ〜！お姉さま！とか、うおお〜！萌え〜！とか、オレを叩いてくれ！などと聞こえてきた。

（てか最後のなんだよ！！）

進は思った、いや悟った。こいつら馬鹿だと。

「進さ〜ん！」

声のした方を見ると、さやかが手を振っていた。どうやら同じクラスだったようだ。

進が手を振り返すと、教室の野郎どもから殺気があふれてくる。

わかりやすいな、と進は少し呆れているが、楽しくなりそうだとも思っているのだった。

第9話：深夜の散歩と爆発（前書き）

ここ最近書いていなかったのだからだいぶ変っちゃったかもしれませんが、（元々下手なんです（^| ^;））どうぞ読んでみて下さい。評価してくださるとうれしいです。

第9話：深夜の散歩と爆発

「すう、すう、うあゝチャーシューが……」

どんな夢見てんだよ！

「進さん、起きてください。進さん……」

「んゝどうした？ さやか」

「転入初日に居眠りとはいい度胸だな、仲川」

「へ？ あのゝ誰です…か？」

進は見覚えのない教師らしき人に戸惑っている。まあ見覚えがないのは、はじめから寝ていたからだが。

さやかがこっそりと助け船を出してくれた。

「魔法史の担当の堀田先生ですよ。だから起きてくださいって言ったじゃないですか！」

「いやゝチャーシューにされそうだったんだよ……」

「どんな状況ですか！ あとそうなたら私がいただきます！」

さやかツツコムのはいいけど、ずれ過ぎ。

堀田はものすごく不機嫌そうな顔だ。なんというか嫌味な悪役といった感じの顔である。

「まったく、これだからレベルCは……授業を続ける。教科書五十ページ……」

――魔壊は今から十五年前、魔物は人間界に侵略を初めてきたことを

言う。

その時に軍として結成されたのが『刹那』だ。人は後にこの人と魔の争いを『魔壊』と呼ぶようになる。

刹那は軍といっても当時、五十人ほどしかない。それだけ魔族に對抗できる者が少なかったからだ。そしてその刹那を束ねたのが『代神者』である。代神者は今でも行方不明であり、魔物の王を滅ぼしたときに受けた傷で死んだとも言われている。

「これが魔壊と呼ばれるものの大体の内容だ。……さて代神者の名前の由来だが、その力は神の如くあまりにも強大だった。そして当時の魔王を倒すために、神に使わされた代わりの者、ということとその名が付いている。」

進は自らの字の理由あざなを聞き苦笑いしていた。

（まさか名字が神代だから神と代を入れ替えただけなんて言えないよなあ…）

堀田はここまで話すと、いやらしい笑みを浮かべた。

「さて、では次はレベルCの仲川にもわかるように、ランクについて話そう。」

わざわざ進を名指しで言ってくる。あの馬鹿にした態度、いやらしい笑み、さやかは何か言い返そうとしたが、

「やめとけ。さやか」

「でも……」

「いいんだよ。ランクだけがすべてじゃないさ」

「……………はい」

さやかは納得していない様子だが堀田は話を進めた。

「まずランクにはEからSSSまである。EからCはエレメンタルクラスと呼ばれる」

堀田は進の方をむきニヤリと笑っていった。

「まあ通常は小等部から中等部のなかばまでのクラスだなあ……まああくまでも通常の話だがな……ククク……」

進はなぜ馬鹿にされているのかようやく気付いた。

（なるほどなあ、だからみんな笑ったのか。）

堀田は楽しそうにそう言う続けた。

「そしてBからSまでがハイクラスと呼ばれる。ハイクラスから上は支配者クラスと呼ばれ、そのクラスは刹那しかない。」

（ふうん、翔子がいつていたのはこういうことか……なるほど……レベルが低いほうが夜動いても疑われない……か……）

授業が終わると、さやかがかなり怒っていた様子で進に怒鳴ってきた。

「進さん！なんで何も言い返さないんですか！」

「だってレベルCであることにはかわらないだろう？」

「それはですけど……悔しくないんですか！」

「別に？」

「あう……もういいですっ！」

さやかは声を荒げて、そっぽを向いた。

（やれやれ、何でそんなに怒るかなあ。そういえばあの娘……神代か……しかも何であんな怪しい服で魔法陣を？……でも聞いて正体バラすわけにもいかないし、まあ翔子に調べてもらうか……）

進は廊下側の一番後ろの席で質問攻めにあっている姫を見ながら、何者だろうかと考えていた。

――夜、闇の中を何かが動いている。進だ。白銀のゴーグルと手袋がその何かの位置を教えていた。刹那任務の時、隊長が使用するものだ。

進は職員玄関から入った。ここは翔子からロックナンバーとカードを借りているから問題はない。しかし刹那の管理している禁書庫ではそうはいかない。

（見つかったときどうすっかなあ。その場にいる全員気絶させて逃げられないな……）

なんて物騒なことを考えつつ、進は職員玄関から階段を使い、五階の禁書庫をめざした。

進は音を立てぬよう、しかし物凄いスピードで五階に到達した。

ゴゴゴゴ、ドオオオン！

「うわっ！のあああ！！と、トラップスperl！？」

進が五階の廊下を踏んだとたんに、爆発が起こった。しかし廊下と壁にはほとんど傷がついていない。

（さすが、刹那養成学校だな……しかし今のトラップスperlは刹那の呪文じゃない……誰かオレ以外の侵入者がいるな……）

トラップスperl……魔法の地雷みたいなものである。一応、高等魔法ではあるが普通、校内では使用しない……って当たり前か。

「誰かいるのか？」

ゾクッ！！

「ッ！！」

進は悪寒がしたのでその場から飛び退いた。その直後、進がいた場所には黒い炎が燃え盛っていた。

「ほう……私の攻撃を避けるとはただの盗人ではないな……」

煙の向こうから声が聞こえた。

「キャ、キャ○ツアイ！？」

「だ、誰がだ!! しかも最近の子はわからんぞ!!」

だんだんと煙がはれてきてお互いの姿をかくにんする。姫だ。なかなかツツコミもさえている。またあのかなり怪しいキャッツ○イミ
たいな服を着ていた。先に声を上げたのは姫だった。
進の格好を見て、目が据わった。

「貴様……誰に断ってその格好をしている……」

「ん? これ? 別に断らなくてもいいだろう?」

「それは刹那特務隊隊長の物だ。……貴様ごときが着ていい代物ではない!」

言うと同時に姫は武器であるムチをしならせ、進に放ってきた。

「うわっ! 当たったものすっごい痛そうだし、オレそんな趣味ないんだけど……」

「き、貴様ああ!!」

進は驚いたもののすぐに避ける。ムチはリーチが長く、予想外な動きをする。だがその分扱いが難しく、接近戦には向いていない。さらにここはいくら広いといえど、廊下だったため、進にとっては避けることはたやすかった。

進は持ってきていた銅剣でムチをはじきながら距離を詰める。進は姫との距離を詰めるが、後ろから足音が聞こえてきた。

「ちい、ここまでか……覚えておけ、偽物!」

『風の精霊よ、我に翼を与えよ。レイヴン!!』

「ちよ、ちよ待てよ!!」

姫はさっさと飛翔呪文で窓から出て行ってしまった。警備員が駆け

つけたとき残されていたのは進と、たいして似ていないモノマネをした後に残る。冷たい空気だけだった。

第十話：秘密と悪意の交錯（前書き）

今回は、前に比べてとても長いです。私が下手なものでまとめ切れませんでした。でも最後まで読んでいただけると、ありがたいです。

第十話：秘密と悪意の交錯

「あのー、怪しいものじゃありませんので・・・オレはこのへんで失礼します・・・」

「まてい！ここまで怪しいヤツも久しぶりにみたぞ！？」

進を見つけたこの生徒は、生徒会副会長、山辺^{やまべ}である。

がくぶちメガネな堅物だ。ちなみに脇役なので下の名前はまだない。

「ふむ・・・しょうがないな・・・」

「何がだ？それより今から君を捕獲する。ちなみに君に黙秘権はない」

「捕まったら・・・だろ？」

「は？な・・・」

山辺は最後まで話すことができずに気絶した。進が素早く後ろに回り、首に手刀を打ったのだ。

「さて、人が来る前にいくか・・・あれ？」

ードタドタドター

「そこまでだ！おとなしくしろ！」

騒ぎを聞き付けてきたのは、数人の生徒と先生らしき人ひとりだった。

「なっ！？」と、特務隊隊長？なぜここに！？」

先生らしき人は進の着ている服をみて驚いたようだ。

（この服を知っているということは元刹那か・・・いや、現役かも

しれない。やっかいだな・・・仕方ないここはひいとくか・・・」
『輝ける者よ。汝の閃光にて敵を惑わせよ。シャインサイト』
「うわっ！まぶし・・・」

【進の部屋】

進は飛翔呪文で直接、部屋の窓からなかに入った。

（ふう、何とか逃げられたな。しかしこれからどうするかなあ。もしかしたら警備が強化されるかもしれない・・・）

【五階、禁書庫前、廊下】

「う・・・し、侵入者は!？」

「いない・・・逃げられたな・・・」

進は目くらましをして窓から飛翔呪文で逃げていった。
しかし先生らしき人は逃げていった侵入者を、まるであり得ない物を見るような目で見ていた。

（なぜこんなところに特務隊長がいたんだ？そもそもあの制服は三年前に廃止されたんじゃないかったか？しかもあの制服が与えられた人物は全員死亡または行方不明・・・）

「先生！先生！特務隊長ってどういうことですか!？」

「あ、ああ・・・あの制服は以前の特務隊長のものだ。」

「特務隊長!？では刹那の!？」

「いや、あの制服を持つ物は今生きてはいないだろう。」

「えっ!で、ではあれは・・・」

「偽物か・・・それとも、亡霊か・・・」

【翔子の部屋】

翌日、進は朝早くから翔子を訪ねた。翔子の部屋はめっちゃ豪華で、なんだか翔子にシャイニングウィザードをしたい気分になった。まあ後が怖いからそんなことはしないが。

「翔子、起きろ！起きろってば！」

「もー誰よー。こんな朝早くからー。って進ー！？ちょっと何ー？夜這いー！？んー今だったら朝這いー？まあ、どっちでもいいけどいいよー。」

「なにがだ！」

「まあー冗談はおいといてーなにー？進がこんな時間に起きるなんてー日本の借金が全部なくなるくらいあり得ないことだよー」

「ニホン？なんだそれ？」

「んーこっちの話ー」

「そ、そうか。とにかくだな・・・」

進は昨日の進入したときのことを話した。

「あーじゃあ今度からー刹那から直接ー警備に来るかもよー」

「かもよー。じゃなくてどうすんだよ。もう禁書庫に入れなくなるのか？」

「まだー方法はあるよー。」

「よ、よかった・・・それでその方法って？」

「あとー一週間後にあるーランキング戦でー上位10人に入ればー許可がもらえるよー」

「ランキング戦？それで十位以内だったら楽勝だろ？」

「でもー今、進はー力をおさえてるしー勝てるかわからないよー？」

「ええっ！？指輪はずしたらダメなのか？」

「当然でしょ？あきらかに学生じゃないってばれるわよ」

「うーん・・・じゃあ神具使っていいか？」

「ダメに決まってるじゃない！！！」

実は言うと、進も翔子の『風神』のように神具を持っている。

「じゃあどうすんだよ・・・」

「もうく代神者のくせになさけないのよ！学生くらい何とかしなさいよ！」

「はあああああ。わかったよ・・・ボソ。（ち、三十路め！）」

「のあああああ！！！！！」

進は翔子からの『お約束』をなんだか気持ち悪いクネクネした動きでかわした。

あれ？・・・かすってる？・・・なんか進の所々から赤い物が出てる気がするけど、まあいいや。お約束だし。

「なあにいかあいったかな？」

しよ、翔子の凍り付いた笑顔は進まで凍り付かせた。ワンパターンで言われそうだけどこれは勘弁してほしい。あくまで言っているのは進だから。

「いい言ってますん！言ってますん！言ってますん！」

「そうくならいいわ」

進はさすがに命が惜しいようで話題を変えた。

「そういえば、昨日、侵入したときにもう一人の転入生がいたんだ。」

「それがどうしたの？」

「いや、それがどうしたって・・・その娘がまえ話した魔法陣を落としていった娘なんだ」

「ふうん。たしか名前は・・・神代？」

「そうなんだ。心当たりはないんだ・・・まあ、オレは孤児だしな・・・ちよつと探りをいれといてくれないか？」

「はい。わかったわよう。あとランキング戦なんとかしなさいよ」

「ぐ、・・・わかったよ。」

進はそれだけ言うと、翔子の部屋を後にした。

翔子は進がいなくなると、顔を引き締めた。まるで内心の動揺を隠していたかのように。

（進。その子はね・・・いづれあなたも知るときが来るのかもしれない。だけど今は話せない。きつといつか必ず話すからね・・・）

進は翔子の思う事など知るよしもない。だがいづれすべてが明らかになるときのために、翔子は覚悟を決めるのだった。

【???】

ここは、学園のどこか・・・闇に紛れ、どこからともなくささやき声が聞こえてくる。

ある教室でその密談は行われていた。

「まさか、貴方様がここにいらっしやるとは思いませんでした。どうされたのですか？何か問題でも？」

「いえ。私も別の用でたまたま近くまで来たのですよ。少し気になることもありましたが、私も潜入して様子を見ようと思ひまして。」

「気になること・・・と申されますと？」

「貴方が以前、報告した年齢退行した男が行方をくらしました。」

「そ、それは本当ですか？」

「ええ。そしてその男を診察した医者というのがこの学園の学園長なんですよ。それで私も潜入したのです。貴方はもう少し様子を見て下さい。」

「は！では、戻ります。ああ、後一つ申し上げることがあります。」

「なんですか？」

「はい。今夜、侵入したとき刹那特務隊長の装束を着た男に妨害をされました。偽物とは思いますが、念のためにと報告を・・・」

「特務隊長ですか？・・・わかりました。戻りなさい。」

「は！」

教室から出てきたのは、姫だ。姫は自分の宿舎へと戻っていった。教室に残った男は、何かを考えているようだ。その時、月明かりが男の顔を照らす・・・

・・・その顔はあの温和な微笑みはどこにもない。丸いめがねも外して、目からは鋭い眼光を放っている。

その男の名は、神崎祐。

「ククク、特務隊長ですか・・・だが、障害があるほど、ゲームはおもしろい物ですからね。」

神崎の声が響く。その声は誰にも気づかれない。その声の主はそう

いうと闇の中にまぎれていった。

第十話：秘密と悪意の交錯（後書き）

なんだか、今回はシリアス？ 気味だと自分では思います。基本はラヴコメなんですけどね。笑））まだまだ未熟ですが、読んで下さって本当にありがとうございます。

できれば、評価も・・・って調子乗りすぎですね。それはともかく、これからもよろしくお願いします。

では！また次回に。

さくら朔

第11話..お約束って大事ですよね（前書き）

ども！久々の投稿です。ペースがバラバラですいません。評価のほどよろしくです。！

第11話..お約束って大事ですよ

「はい。おはようございます。」

神崎が教室に入ってきた。いつもの笑顔で、だれもこの男が企んでいることなど知るわけがない。

「「おはようございます。」」

相変わらずこのクラスは明るい。なんていうか、動物園って感じだ。

「えつとですね・・・昨日、学園に侵入者がいました。それで今日から刹那より警備が配属されます。」

ええ！刹那から・・・？

それよりも侵入者って！？

生徒達は、騒ぎ始めた。刹那は普通の人間と力が違いすぎる。尊敬はされていても、恐れはもたれている。

「ええーと。みなさんお静かに。刹那から警備がつくといっても、配属されるのは5階の禁書庫前ですので心配はいりませんよ。」

(ちっ！やっぱりか・・・ランキング戦で勝つしかないか・・・)

だが教室の騒がしい声はおさまらなかった。神崎先生は諦めたように、話題を変えた。

「それよりも！皆さんは来週のランキング戦に備えて下さい。今日

から一週間、準備期間になります。今日から授業ではなく、各自、自習という形で準備をして下さい。まあ、友達とトレーニングするもよし、一人で山ごもりするもよし、何をしてもいいので、鍛えて下さいね。」

そういつて神崎先生は教室からでていった。みんな、仲の良いもの同士、どうするか話している。するとさやかが進の席にやってきた。

「進さん。進さんはどうしますか？山こもりますか？」

「いやいや、こもらないけど。んゝとりあえず今日は戦ってみないか？」

「はい？誰とですか？」

「オレとさやかか？」

「ええゝゝゝむ、無理ですよー。」

「なんでだよ？別にいいだろう？」

「だって進さんてめちゃくちゃ強・・・ムガッ！」

「どうしたんださやか！なんだって！？気持ち悪い？大変だー！（棒読み）」

（そうだった。あの時、力を封印していたとはいえこいつに見られたんだった・・・）

進のわざとらしすぎる演技になんだか周りからの視線が痛い。特に男からの視線がいたい。それもそうだろう。進は何も意識していないが、さやかはこのクラスのアイドルの存在。どの男子もまだ気軽に話せるほど仲良くなれていないのだ。進がそうやってさやかを廊下に連れ出そうとすると、男の子3人組が声をかけてきた。

「おい！仲川！Cクラスのくせにずいぶんとなれなれしいなあ・・・ああ？」

どこにでもいるようなムダに威張った奴らだ。ものすごいこの先の展開が予測できてしまう。どうやら真ん中のやつが、リーダー格のようだ。それと読者の皆様はお忘れかもしれませんが、進は仲川と名のつていますので、あしからず。

（こ、これはまさか・・・で、伝説の・・・YARRAREYAKU
!？）

進は心の中で、彼らを不良A、B、Cと命名した。

「・・・おい！聞いてんのか！」

「なめんなよ！」

「びびってんのか!？」

ありきたりなことしか言えないA、B、C。進が無言で教室から出て行こうとすると、A、B、Cは襲いかかってきた。

不良Aの攻撃。進はひらりと攻撃をかわした。

不良Bの攻撃。進はひらりと・・・

不良Cのこうげ・・・

「く、卑怯な！」

「せめて最後まで攻撃させてくれてもいいのに！」

「ちっくしょー。くら・・・え・・・」

進は聞くのがめんどくさくなって、3人とも殴って気絶させた。

「ふう。とりあえずやることはやっておくか。」

「やる事って何ですか？」

さやかが不思議そうに訪ねる。そう。進の言うやることとは例のあれである。

進は不良に話しかけた。……返事がない。ただの屍のようだ。

「よし！じゃ、行くか。」

「……はい。」

進とさやかが、教室から出て行こうとすると、一人の派手なやつが声をかけてきた。

「なあ！なあ！仲川っていったっけ？オレと戦わないか？」

声をかけてきたのは、短い金髪に、彫りの深い顔で筋肉質なやつだった。なんだかメチャクチャ、スルーしたい気持ちになるが、まだ登場人物が少ないという、ギリギリの事情でスルーするわけにもいかない。

「やだ。めんどい。うざい。暑苦しい。離れろ。」

「なっ！？なぜにそこまで？」

「なんとなく。」

「ぐあ……」

進の今の姿はかなりかわいく見えるので、それなりにへこむ。

「進さん……そこまで言わなくても……」

さやかが進をなだめる。さすがだぜ、さやか！さすがヒロイン！

さすが癒し系・・・

「確かに、桂さんはうざくて、暑苦しくて、その上恥ずかしい人で
すけど、そこまで言うとか、かわいそうですよ。」

・・・じゃなかったか。恐るべし天然！

「なんでだよ！さやかさん！あと増えてるし！そこはフォローじゃないの！？」

「ふん！使い捨てキャラにフォローなんて必要ないわ！」

「使い捨てじゃねえよ！」

「うるさい。だまれ。」

「ひでぶ！！」

どこかで聞いたような奇声を発しながら、桂と呼ばれた男は、床に沈んだ。最近また進のキャラが変わった気がする、という人は気にしない気にしない。

「さて、じゃいくか。」

「はい。進さん、ちゃんと手加減して下さいよ？」

「なんのことだ？オレはCクラスだぞ？」

「ええ〜！？進さん！？」

「くく、冗談だよ。」

「当たり前ですよー」

「・・・ってまでコラー！！なんすかそれ！？オレ、スルー？
無視？ムシ？MUSHI？ってかさやかさんまでシカト！？ちょ、
ちょっと待ってー！ホントに！」

「・・・はあ。なんだ読み切りマンガ？」

「読み切りマンガだってそのうち連載に変わるんだってばよ！」

「わかった・・・じゃあ戦うよ。」

「語尾スルーキターーーーAHHHHH！！！」

この後もこのやりとりが、10分ほど続いたのだった・・・。

「かってに終わるんじゃないー！！！」

しかし進のセリフとは裏腹に、この男は使われることになる・・・
謎の瞬間復活をする男として・・・クククツニヤ！！（by作者）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9541a/>

ーカクテルー

2010年12月14日14時24分発行